

## ことばの糸

中山大学 王羽晴

「ただいま」「お帰り」

これが私の好きな日本の言葉だ。この挨拶を、日本人はいつも口にしている。ごく普通の挨拶言葉だが、私にとってはまるで魔法のような言葉である。

日本に短期留学したことがある。入寮日の一週間前に日本に着いたため、インターネットで予約した民泊施設に一週間泊まることになった。そのホストは旅行関係の仕事をしている二十代の男性だった。仕事柄外国人と接する機会が多く、東京に来た外国人観光客とふれあう機会をもっと増やしたいと思い、自分の部屋の一部を観光客の宿泊用に改装したという。とても明るく、人懐っこく、それでいて細かい気配りのできる人だった。人見知りで、人に壁をつくってしまうような私でも、彼とはよく話すようになった。

仕事のため、その人はいつも私より帰ってくるのが遅かった。夜、私がテレビを見ていると、ドンドン、と少し大きなノックの音が聞こえ、ドアを開けると「ただいま!」と、彼は明るい声で言った。目が合ったけれど、どうすればいいか分からず、一瞬戸惑った。何秒後かに、「お帰りなさい」と、私はたどたどしく返事をした。向こうはそのごく普通の挨拶を特に気にした様子ではなかったが、私は、その言葉を口にした瞬間、不思議な気分になった。私はゲストであるはずなのに、なぜか自分の家にいるかのような感覚になった。

それからというもの、私はその挨拶にだんだん慣れ、ごく自然に挨拶を交わすようになった。気付けば私の口数も多くなり、彼との会話も増えていた。そして、いつの間にか、「お帰りなさい」も「お帰り」になった。一人で部屋にいるとき、いつも彼が帰ってくるのを心待ちにしている自分がいた。「お帰り」を言う瞬間が毎日の楽しみとなっていたのだ。その人が帰ってきたときに、ちゃんと「お帰り」を言いたいと、すっかり迎える側になってしまった。しばらくしてから、彼に、「こんなにおしゃべりだとは思わなかった」と言われたことがある。極めて普通の挨拶である「ただいま」と「お帰り」は、まるで魔法のように私の心を開き、彼だけでなく、他の人に対しても、いつしか壁をつくることはなくなっていた。

その二つの言葉は、永遠に続くような安心感を与えてくれる。見知らぬ人でも、その言葉を使うと、一瞬で親しくなったような気さえする。大げさかもしれないが、彼のアパートを出るとき、これからは「ただいま」と「お帰り」を言う相手がいなくなる、と少し残念に思った。しかし、その後、寮生活が始まり、毎日寮の門を通る度に、警備員さんが「お帰り」を言ってくれた。毎日「ただいま」を言っているうちに、その挨拶は当たり前のようなようになったが、やはりいつもその言葉の温かさを感じていた。大雨や大雪の日でも、疲れてクタクタな日でも、ドアを開けると「お帰り」と言ってくれる人がいる。迎えてくれる人がいる。待っていてくれる人がいる。その言葉はその大切さ教えてくれる。

「すべての人が他人になる夜が続く」と、『火花』という本の中で主人公が呟いた言葉がある。馴染みのない異郷での暮らしをつらいと思っている人は、どの街にもいるだろう。部屋のドアを開け、誰もいないその空間で、ため息をつく。もしかしたら、誰もが、「お帰り」という言葉を、そして伸ばされてくる腕を待っているのかもしれない。

言葉には力がある。この異国の土地で、よく考えたら私は、「ただいま」と「お帰り」を言う立場ではなかった。でも、この言葉を口にするうちに、異国の地で張りつめていた緊張の糸が緩んだ。心が開かれ、受け入れ、受け入れられた気がした。そのなんてことのない言葉が教えてくれた。私には、いつも傍にいてくれる人がいるから、帰れる場所があるから、寂しくない。

あなたもきっと、「ただいま」と「お帰り」を言うときがあるだろう。それは、誰かとおつながっている証だと思う。きっとあなたの周りにも、温かい言葉の糸が張り巡らされている。